

研究要旨

指定課題研究「ポストコロナ時代の医療経営」 「乳がん術後連携パスの活用による患者 QOL の改善効果と クリニックの経営的ポテンシャル」

スリーロック株式会社 シュナック千賀子

がんの摘出手術後のフォローとしては、手術直後においては切除部分の快癒と生命の維持が最優先であり担当医の責任範疇であるが、急性期を過ぎれば患者はその後の人生をどのように立て直すのかが大きな課題となる。それは外科的領域とは異なる生活に紐づいたケアが必要とされる分野であり、地域医療、あるいは地域包括ケア的な要素が多分に含まれるところである。その点においてがん術後の回復期におけるクリニックが果たしうる役割は大きいと感じる。

アンケート回答から、術後の不調に関するケア、治療については、大半のサバイバーが手術を行った病院以外の施設で行っている実態が明らかになった。ただしそれは、自ら他院を選択したというよりは、手術を受けた病院で満足できる術後ケア・治療がなされず、しかるべき紹介がなかったため、試行錯誤のなか自力で術後ケアの施設を探し続けた結果という姿も見受けられた。この研究を通じて、術後ケアに関する医療連携パスというものが存在するのであれば、サバイバーはどこで誰に相談してよいかわからないという不安を軽減することができ、QOL の改善に役立つであろうということが示唆された。

一方、クリニックでは術後ケアの全てを自らの診療範囲内で行うことは困難であり、必要に応じて他の施設を紹介するというかかりつけ医としての役割が期待される。それには日頃からサバイバーがかかりつけ医を持ち、自身の不調について相談できるアクセスがあることが前提となる。かかりつけ医としてのクリニックが症状に応じた振り分けと紹介を行うことができれば、その医師に対するサバイバーの信頼と満足度が上がり、地域で頼りにされるクリニックとして長期的収益の向上に貢献すると考えられる。

クリニックが診療範囲外のケアを併設施設において行うケースも見られたが、経営特質の違いもあり採算面で難しいようである。地域包括ケアにおいて様々なプレーヤーとの連携が益々重要になるなか、医療機関以外のケア施設との連携の活用なども期待されるところである。